

ウーダン

No. 3

1988.8.29

HUTAN

発行 “森と生活を考える会”

大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308

(マレーシア語で森の意味)

「自然をかえせ！関西市民連合」事務所気付

☆ もくじ

マレーシアで見たこと・考えたこと

マレーシア・サバ州の森林および林業について、

山は誰のものへシリーズ 3回目

“ウーダン”勉強会報告～『アジアを知りたい』

生活の中から森を考えるへシリーズ 1回目



アナン族、彼等は、熱帯雨林のなかに現存する最後の狩猟採集民族だと言われる。
この何世紀もの間彼等は、サラワクの森を生活の糧として生き続けてきたのです。

マレーシアで見たこと・考えたこと 塚森 風太

私たちを乗せた観光バスは、マレーシアの首都クアラルンプールからポートクランに向かう高速道路を走って行く。道路沿いには工場が点在していて、松下・ヤマハ等日本企業のものも多い。やがて、風景は一面のゴム園とヤシ園に変わり、約一時間後で第一の目的地である本村乾燥工場に到着した。

私の勤める本村輸入会社と取引のある高松の材木問屋が、得意先を兼ねてマレーシアツアーを企画、そのうち一日をゴムの工場見学にあてることになった。案内役は、現地のシッパー（輸出業者）中国系マレーシア人のアレックス。私は通訳として同行することになった。四月に入社したばかりの私にとっては、初めての海外出張である。

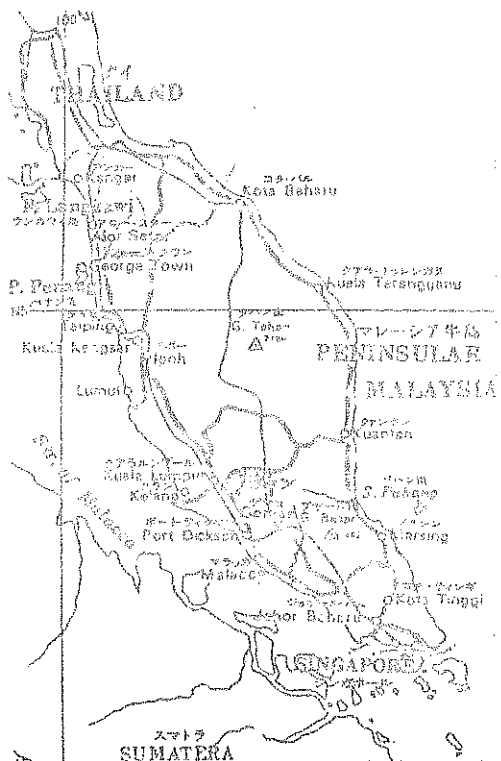
乾燥工場では、製材されたゴムの角柱を窯に入れ水蒸気で加熱し、水

分を一五パーセントぐらいにまで下げる。乾燥させるのは、くさりや曲がりもなくすためだ。乾燥にかかる時間はサイズによって異なり、長いものは約二ヶ月もかかる。

天然ゴムは、マレーシアの主要な輸出品のひとつである。ゴムの木は、三十年余りで樹液が出なくなり切り倒される。この廃材が、新しい技術が開発されて使用できるようになった。廃品利用だから値段は安い。日本では、こたつの脚などに益んに使われている。乾燥が終わった製品が、日本向けはビニールをかぶせて

韓国・台湾向けはそのまま、工場内にたくさん積んであった。

午後からは、カチャンにあるゴム製材工場を見学に行く。村はずれのゴム園の中にある小さな工場だ。製材機械が二台、丸太を小さく割るためのものと、それを色々なサイズに製材するためのもの。それぞれ二人の男がついて作業をしていた。製品を運んだり積み上げたりする女たちが混じって、一二歳ぐらいの男の子がふたり働いていた。それを見て私は少しショックを受けた。



マレーシアは、東南アジア諸国の中では比較的「豊か」だと言われている。それでも、子供が工場で働かなくてはならない「貧しさ」があるのだなあと、その時は思った。しかしよく考えてみると、労働の場から切り離されて詰め込み教育を受けさせられている日本の子供たちと比べて、どちらが幸せなのだろうか。少なくとも、マレーシアで見た子供たちの表情は、みんな生き生きしていたように思う。マレーシアでは、人々は確実に日本よりゆっくりと歩いていた。走っている人の姿は、一度も見かけなかった。人ごみにまぎれていても、不思議なあたりかさを感じた。日本に戻ってから数日間、ラッシュ時の人々の疲れた不機嫌な顔に違和感を感じ、日本の速いリズムについていけずに苦労した。

マレーシアと日本の関係は、私たちが考えている以上に深い。マレーシアの最大の貿易相手国は、日本なのだ。

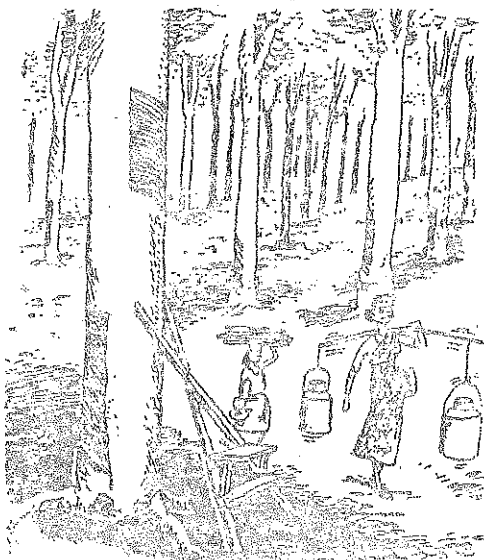
街で見かける自動車・バイクの大半は日本製。ショッピングセンターのウィンドーには、日本製の電化製品・時計・カメラなどがたくさん並んでいる。日本企業の看板がやたらに目につくし、日本の百貨店もある。その一方で、マレーシアから日本へは、木材をはじめ天然ゴム・すず・パームオイルなどの一次産品が輸出されている。最近では、豊かな資源と安い労働力に目をつけた日本企業の工場進出も増えている。

これほど経済的な関係が深いにもかかわらず、私たち日本人はマレーシアのことをほとんど知らない。日本の木材需要を元たすためにサバ・サラワクの熱帯林が破壊されていること。一見平穏で治安が良いようにみえるが、実はかなり強権的な政治が行われていること。そして、第二次世界大戦中、日本軍によって中国系住民が数えきれないほど虐殺されたことも。

マレーシアを訪れる日本人は多いが、その大半はビジネスマンか、ショッピングと女が目的の観光客だ。

彼らの多くは、マレーシアを商品の産地としか考えていない。工場で働く男たちも、ナイトクラブの女たちも単なる物なのだ。東南アジア、そして第三世界の国々に対する日本人の発想である。

私は、日本人の殻を捨て去りたい。アジアの人々と同じように感じ、ともに世の中を変えていきたい。そんなふうに思っていると、アジアの人々が、困難な問題をたくさん抱えながらも「豊かに暮らしていることが、そして、「豊かな」日本の見えない病める部分が見えてきた。



寄稿

マレーシア・サバ州の森林及び林業について

森をみつめる会・重武達

熱帯雨林に関係する人にとっては、サバはよく耳にすることであろう。マレーシアの一部でありながら、ほぼ独立的に扱われている理由は、この地がマレー半島から遙かに遠く離れたボルネオ島北部に位置することの他に、その歴史的背景や民族的基盤からも、又日本にとって半島部のマレーシアよりも木材輸入貿易に於いて、格段に大きなウェイトを占めていることからサバを単独的に扱うことが適例となっている。

私とサバとの関係は、1981年4月から1983年9月の青年海外協力でその生活が最も大きく深く、その後1984年の2月及び今年の1988年6月の視察、調査で訪れており、縁が深い。

私がサバに初めて入った時は、既に美しい天然林の殆どは皆採られており、地園の上では娯楽林は登録されているものの現実はそうではないことが多かった。

下表のサバ州の森林面積の現況をみてここで是非注目すべきことは、保護林が行政上、保護政策から滑り落ちてどんどん減少していく姿が、数字から読みとれることであり、面積の縮減として森林地区（森林業用地、国立公園地）が農地（その他の国有地）に転換されていることである。これは、森林の質を問う問題以前に重大な政策基盤の問題であり開発途上国の経済問題を反映したものとして考えなければならぬ。実際に一度サ

サバ州の森林面積の現況 (10km ²)	As at Dec. 1978 (a)	As at Oct. 1979 (b)	(予測) Estimate for 1990 (c)
<u>Forest Reserve Classes</u>			
Protection (保護林)	746	218	120
Commercial (経済林) (国有林)	3,023	3,274	2,562
Domestic (自家用林)	17	17	8
Amenity (レクリエーション林)	20	15	4
Mangrove (マングローフ林)	76	75	80
Virgin Jungle (Conservation) (原生保護林)	48	39	37
Total Forest Reserve (森林業用地)	3,930	3,638	2,811
National Park (d) (国立公園地)	200	120	268
State Land etc (その他国有地)	3,264	3,636	4,298
Total Area of Sabah (サバ総面積)	7,394	7,394	7,394

バの地を訪れ、上空から大地を眺めてみると、よく理解できる。その意味は次の表から十分汲取ることができよう。

サバはその豊かな熱帯多雨林気候の恩恵を、1960〜70年代前半は木材の伐採、輸出で吐き出し、その後についてはプランテーション農業によってパーム油の生産では世界一、カカオの生産では水面下から一気に世界第四位に食い込む形で総計欄に派手にカムバックしているのである。しかし、これら全てが至近距離にある、一次産品の巨大消費国である日本の産業構造と密接に係わっていることは言うまでもないことである。さて、話を森林に戻してみると、今度はその質の問題が大きく議論されてくる。伐採後の森はどうなっているのか、又ようすすべきか等の問題について、詳しく、正しく述べるには某大な紙面が必要であるので、ここでは、ごく一部の問題点について、お話しするに留める。

パーム油の生産 (千トン) FAOより

	1967年	1974-76	1986年	
マレーシア	217	1191	4542	55.2%
インドネシア	163	397	1298	15.8
ナイジェリア	325	692	760	9.2
中国(台湾省)	—	157	222	2.7
コナジボール	27	150	180	2.2
ザイール	178	180	160	1.9
コロンビア	—	43	130	1.6
世界計	1222	3186	8227	100.0%

マレーシアのパーム油耕地面積の変化

1962年 84,801 Ha 85年 120,000 Ha
「マレーシア投資機会」より

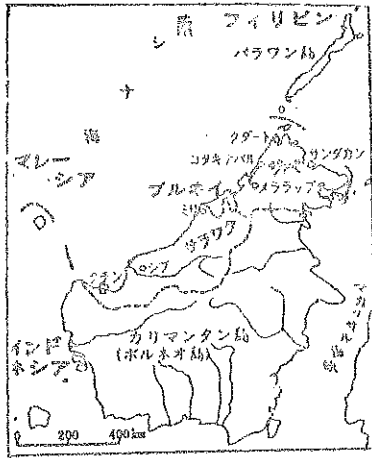
伐採の方法論によつては、即ち残された森林が健康な状態を保持しうるレベルであれば、必ず天然更新が期待でき、一世紀も待たずに再び立派な森になる可能性は十分にあると考えられている。しかし、現実にはそのような伐採方法がとられている林区はまず無いに等しいことから、伐採後は人工的なメンテナンスによつて、森林再生への努力を行なわなければならなくなってくる。ここでマレーシアについて問題点を挙げてみる。

フィリピンやバブア・ニューギニアでは、伐採業者に政府が造林の義務を何等かの形態で負わせるシステムがとられており（インドネシアも同様ではあるが、それらの金の行方は？）これによつて、職分かの再造林努力の足跡は認めることができる。しかるにマレーシアでは、私の知る限り、厳しい立場とっておらず伐採企業の造林努力は一部を除いて、殆ど見ることがない。この点については個々の国の政策問題であり、内政干渉的発言は公の場で言うべきではないが、私の個人的感覚では、現地政府はもっと強い立場をとつて、森林再生の義務を伐採関連企業に負わすべきだと考える。

伐採の許可権を握っている一番重要なポストは、各営林署長であるが、これは一番うま味のあるポストとして森林局内部で理解されている。この人達は、在任中に自分の権限を最大限利用して、伐採業者とはアメとムチで馴れ合いの関係を保持しているのであるが、むしろアメを多く

もらうために、ムチはかなり手加減されてしまうのは人情というものかもしれない。本業の伐採基準に従えば、もっと多くの母樹が残されていなければならぬ。い善の林区が、実に激しく伐採されてしまっている事実は、どう説明したら良いか、これは大変な問題であり、しかもごく一般的の問題であることを、私がサバにいる間に見せつけられたものである。

それは、サバの森が今、どんな状態であるかをよく知っている者としての意見である。又、それは、もの問題について最大の責任を負っている善の日本国及び、日本企業のことからの常識になるべき問題であると考えるのである。



情報ネットワーク

■公明勉強会

9月7日 ニュージャパン環境博物館
 YMC A 奉仕センター P.m 6:30
 発題・田中孝夫氏

9月23日、生活の中の木竹と養蜂養蚕
 大阪市労働会館 P.m 1:00 ~ 4:00 (※森宮下車)
 JATAN・黒田氏らを支え、
 参加者と共に「総括」

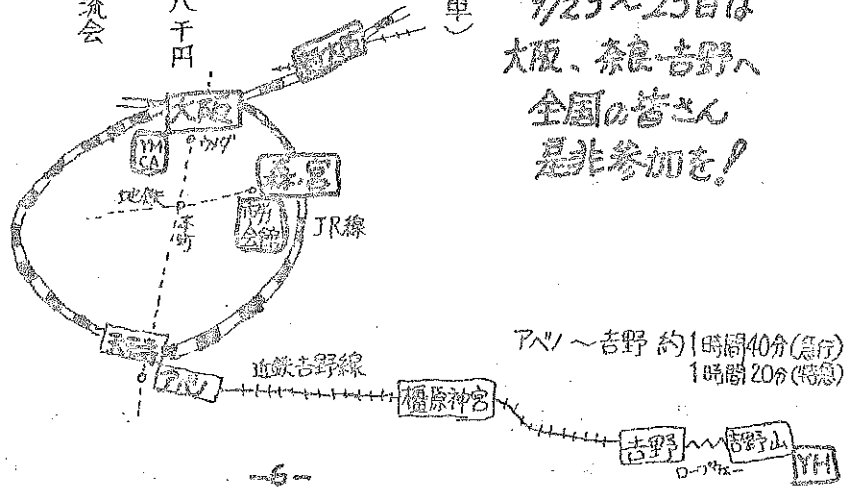
■全国自然保護大会・奈良大会

9月23日~25日 YH真感院・吉野町吉野山
 「巨大国産による山崩壊を許さない!」約八千円
 分科会・熱帯雨林の危機と経済侵略

9月24日 P.m 1時半~6時 分科会 夜間交流会
 25日 分科会報告

その他の分科会 「海を守る」「山を守る」
 「河川湖沼を守る」「くらしと木と農業」「松枯水・農産汚染」
 「核燃料・原発」など
 申込9月初旬、自然連事務局所内の西函(372-1561) 昼間は(072-33-1101内2639)
 又は大会実行委・谷まで(072-22-1785)

9/23~25日は
 大阪、奈良・吉野へ
 全国の皆さん
 是非参加を!



大阪~吉野 約1時間40分(急行)
 1時間20分(特急)

山は誰のもの (3)

「ウベークカー」係わりたくないぞ」

はたやすのり

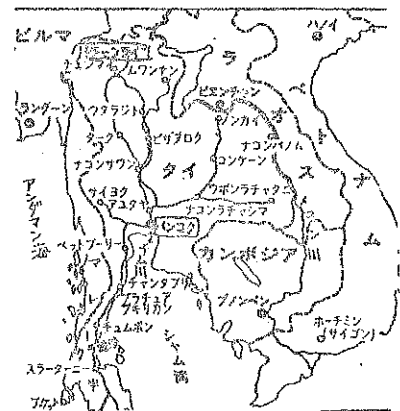
タイには、国体神話が具体的に生きています。それによって王権の確立と、官吏の権力は絶対的なものとなってしまっています。権力者は産業資本の八〇%を握っている華僑に、過大な政治保護を与えて横暴な経済活動を認めるかわりに、収益の少なくない分け前をあずかって富裕な生活を維持しているのです。腐敗しきった政治を諦めと悲しみの目差して見つめながら、タイの民衆は何を心の拠りどころに毎日を送っているのでしょうか。

タイ仏教の伝統として伝えられる戒

めの一つに、「ウベークカー」係わり合いにならない・物事に巻き込まれたくない」という教えがあります。この国を偶然のきっかけで訪れた者にさえ、それが民衆の心のひだに重く沈んでいるように見えてならないのです。

チェンライ県はタイの最北端に位置するのですが、県北東部のアムプーン・パヤメンライはとりわけ貧しいので知られています。この寒村でも華僑商人の貪欲さが、無気力とも思える農民を徹底的に痛めつけていたのです。

ある伝をたよりに、パヤメンライ



のホイカーンにある農家を巡ねてみました。昼食どきになっても食事の用意をする気配もないので、十才ぐらいの男の子を連れだして、家の外でそのことを聞いてみました。

驚いたことにお米が無いということです。少年のはにかんだような表情を見て、聞かされていた事実に触れた感じで、胸があつくなくなってしまいました。

街道筋に在る華僑の雑貨屋に二人で連れだって行って、一キロ十パーセントの米を一〇キロ買いました。バンコクのような大都会でももっと安く買えるのに、米を生産している農家

が、それよりも高い値段で中国人から買い求めなければならぬようなタイの農村地帯の実情は、経済の実権をすべて異民族である華僑の手に握られているからなのです。いわゆる青田買いというやり方で、収穫まで待てない貧しい農民から華僑は、田圃で育っている稲を安く買いたたいて、自分の店にある日用雑貨や時には精米までも、逆に生産している農家に高く売りつけるのです。青田の稲を抵当に農民は華僑から掛売りをしてもらって、その日暮らしの生活をどうにか立てているのです。

雑貨屋で中国人の子どもの小ざっぱりした服装と、対象的に半裸で素足のまま連れ立って行った農家の少年を見比べてしまつて、私の心は重く沈んでしまつた。少年は私の想いを察するかのようになく、微笑みかけたのですが、私の心は次第に憤りに変わつてゆきました。

「マイペンライ」（仕方が無いさ）彼のその一言で私は店先をやつと離れました。

閑散として人っ気もないこの村に、目立つのは真新しい電柱ばかりでした。「先進国」の経済援助とは具体的にこういう形でしかなく、援助どころか更に農民を収奪してゆきます。

電気が引かれると、この村の寺院にいち早くカラーテレビが日本の商社から寄進されたと聞きました。村の人は当然のように欲しがります。それからは村の経済実権を握っている華僑と、寺の坊主が暗闘します。

この村からも何人もの少女が、電器製品が村に普及するのと入れ替わるように、バンコクへ売られたのか姿を消していったという現象を聞かされました。富裕な中国人や、その陰の権力者の役人や、寄進できらびやかに聳える寺院は自分たちの生活と係わりのない、他人事だと諦めき

っているのが、私の出会つた何人かの農民の姿でした。ウベークカー（係わりの無いことだ）。聞いている私の表情の変化を見て、彼等はいつも判で押したように繰り返すのでした。

東洋経済新報の『海外進出企業総覧・一九八八年版』タイ編によると、タイへの経済侵略を目指している民間の企業は約六百社にのぼります。そのことごとくが、華僑をパートナーにした合弁企業で、政府の要職にある官吏が顧問として名を列ねているのです。『企業総覧』タイ編の各頁には投資目的という項目が設けられてあり、英字のアルファベットを使った記号が企業ごとに書き込まれてあります。もちろん、どの頁にもその注釈が付いています。

A・原材料確保、B・資源が豊富で現地生産が容易、C・労働力利用

コスト減、D・現地政府の産業育成
保護政策上、現地生産が有利
等と記載されています。

権力のかたまりのような高級官吏
を顧問に据え、合法・非合法すれす
れの経済活動をやってのける華僑と
合弁の事業なるが故にの奢りが、こ
の注釈の字句によく現われています。
投資(金)さえ出せば、他人の家へ
土足で入りこんでも平気だと言うの
でしょうか。

バンコクで知りあった日本企業
の駐在員の一人は、「昔いことを除け
ば、この国の駐在でも旨味があるの
です。内地にいるときと同額の給料
は残してきた家族に支給されます。
その上それとほぼ同額の駐在手当に
加えて、合弁の華僑からは一日八〇
米ドルが滞在費という名目で支給さ
れるのです。(八八年三月、一ドル
が百二〇円・タイバーツが五円)
一カ月二四〇〇ドルですから、二九

万円の駐在手当で、五七六〇パー
ツもありますから贅沢できますよ。」

一日六〇パーツの安宿に泊まり、
食事が十パーツか多くても三〇パー
ツどまりの私には啜然としてしま
うような数字なのです。ロングレム(安宿)の近くの公園で友人になれた日雇い労働者のホアンくんは、華僑の経営する倉庫で働いているのですが、朝早くから暗くなるまでこき使われて一日七〇パーツ、それも仕事があれば幸せだということですから、日本人駐在員の話しと比較すると気の減入りそうな現実となっております。

商社の駐在員は合板製造の技術者
だということも知りました。彼がこ
の国に持ち込んだ科学の粋をあつめ
たような合板を作る機械は、直径一
を越える原木を短い時間のうちに
見事な合板に仕上げられるらしいの
ですが、素人の私には製造工程の具体

的な作業には全然興味がなくて、森
林から伐採されるときに地響きをた
てて倒される大木を想像して、痛ま
しいなあと思う感傷の方が強いので
す。

タイの素朴な人たちに惹かれて、
機会があるたびに訪れるのですが、
行くたびに日本人としての無力感に
苛まれてしまいます。「経済侵略が
悪い・自然を潰すな・彼等が貧しい
のはなぜだ・日本が豊かで物が溢れ
ているのは……」それを考えてみる
のが日本人の良心だと思っても、今
の状況では眩きになってしまっただけ
なのです。

「ウベークカー」係わりたくない
さ。他人のことだから知らないよ」
ではないのですか。

タイでは一九六〇年に五三%
あった森は、切られて八五年
には三〇%を割っています。

アジアを知りたい



菅原 英俊

自分をとりもどすためにも、日本を交えるためにもアジアを知りたいと思っていた。そんな時、ウータンシの案内が来たので参加してみた。

スライドで見たボルネオの森林は荒れはてて、原始林などほとんどない。オランダウータンもさぞ、生きにくかろう。

ボルネオの人々は、どのように生活しているのだろうか？ 伐採の仕事が増えて、生活が安定したのだろうか？ だが、あの森林の荒廃の進行から考えて、長続きはしないだろう。事実、生活基盤を破壊された住民は、伐採道路をバリケードで封鎖したという。切り出された木材は大部分日本へ来る。資本主義のルールは常に経済大国、日本に有利に働き、ボルネオの自然の荒廃や住民の生活破壊はお

かまひなしだ。それに対して、金もつけに群がる日本の企業やボルネオの一部のエンジニアたち。

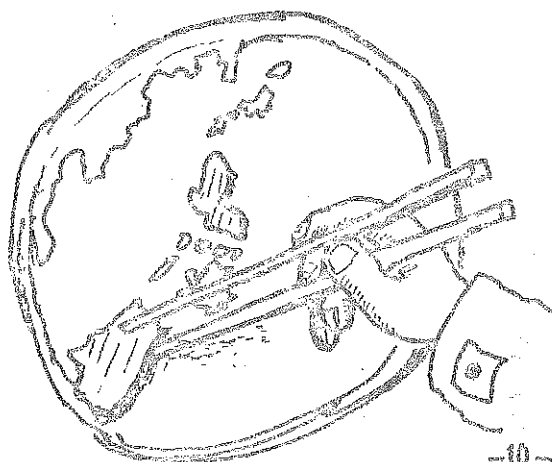
レポーターの宮武氏も話していたが、植林すれば、けっこう森林は再生するらしい。これは大きな希望だが、サバヤラワフ州政府は植林を義務づける法律もなければ、やっけていく意志もないらしい。

「マレーシアの政府は何をやっているんや」と思ったが、そう感じるのがおかど違いで、彼らは伐採業者に便宜を計り、保護林をほとんど伐採可能な森林に認定がえをしているということだ。要するに目先の金もつけ、GNP増大へと働いている。

こう見てくると、熱帯林を守るのは容易なことではない。唯一の救いは、現地

住民の立ちあがりだ。住民が自分たちの生活を守り育てる組織を造り、資源を自分たちに役立てるように使うのが一番大切なのではないかと思われた。まして、森林はうまく管理すれば、再生可能な資源である。

ともあれ、この8月末からフィリピンに短期の旅行を計画している。まずアジアを感じ、自分の中にアジアを受け入れることから、始めなければならぬ。今もってアジアを知りたい。



ハシリズ 生活から毒を考える！

公開勉強会での討論より日常生活をふりかえって...

鈴木千夏

8月24日の公開勉強会では、紙の消費についてどうしてママの1つとして意識がなされた。そこ、マ・とひつちやさんですが私が、いつどこで聞いたのかも忘れたがある議論をいっせき……下。

「ある、始末家の男は、一枚の半紙でも三度の 使い道があるという。一度使ったものをそのまま捨てずに取っておけば、風邪をひいたときの鼻紙に使える。それを、日のしたで乾かして、最後は衛生紙として使う……というのである。それを、聞いていたおっちゃんやおっさんの類。一週間ほど、落し紙に使った半紙を袋に入れて、壁に貼ってあったのだからなまらなび……。」「おっちゃんおっちゃんだったと感心。」

どいていた議論は面白かったのが、何となく頭に残っていたんだ。物 が流れそして重なる瞬間に……。物 を手に入れる

「このプラスチックの中で、物 があふらな海綿やクッションの使い方をしているのではないだろうか。身の回りを整理する？ ポップアップ

式のティッシュペーパー、次々出てくるのをいって、「必置の手に挿んで、大して汚れてはいないのに、その勢いに任せてゴミ箱へ。」「おっちゃん、勉強会でも話題になっ

なければ、洗面所でトイレトペーパーをハインズの代わりに使っているというOの群かどう？ 清潔にした手紙、横り積まないのこじり用紙、等等……。仕方がないの？

でも、一寸、考えてみるければ……。一度くわがこに入ってしまったものは、汚れていようがいまいが、白面が白紙であることが、こじりとして洗面室でもたがず、捨てつてしまわれるがせまの言葉。

何と、先程の 議論の真似をしようというのではなし、また、紙屑として、捨ててしまふために、少し余裕があれば、白面が自身の身の回りにも、人でもできる紙の循环利用がある

つかさどるではないだろうか。そう、私達が使っている紙の原料は、製紙のジャンダルの中から無造作に切り取られてきた木材をつかわれているという。製紙のなかから自然の中へ早く戻すことを考えていた木を、いったい、どれくらい消費をいまでも自分自身、くまなくこに降りかかってきたのだろうか。

(9時から1時まで、膨大な書類(紙)に埋もれて暮らしている会社員より)



～森と生活を考える会～

“ウータン”公開勉強会へのお誘い

9月 3日(土)

野外勉強会～南港・木材野木場見学

集合時間：AM11:00

集合場所：地下鉄ニュートラム 南港口駅改札口前

お弁当持参で～す。

9月 7日(水) 6:30～8:30

“ニューギニア・南洋材物語”

発題：田中 淳夫 氏

場所：YMCA国際奉仕センター

9月23日(金) PM1:00～4:00

“生活の中の木材と森林伐採”

1) 黒田洋一氏(JATAN)を交えて～

2) 総括～公開勉強会をふりかえって

3) 参加者と共に語る～ e t c. (予定)

場所：森の宮 市立労働会館

会費：いずれも 500円 です。

～あとがき～

「援助は援助される側の真の参加を通じてその自立を促進すべき」「援助される側の人々が計画の参加できるようにする。」など、開発援助機関の言う言葉はリッパだ。日本やアメリカは高邁な理想に向け、アジア、アフリカ、南アメリカに道路、ダム、発電所などを造っていった。だが、どうだったのか。

「参加できるようにする」とか「自立を促進すべき」という見下した発想が人々の生活を苦しめているのでは……。 (西岡)

私達の日常生活をふりかえればふりかえるほど、無駄なものがみえてくるけれど、その無駄なものなくなってしまうと、これまた不便。 いっそのこと、自給自足の生活をして山にこもるかーという逃避的な考えをいだいたり。 要するにもっと夢のあることを考えないと私達の運動はどんずまりになりそうである。人間関係をもむだ使い、使い捨て世界がこないことをいのって。(牛島)

暑い夏の中にいると、やたら熱帯林がどうのこうのといわれるチャンスが多かったりして注目をあびるけれど、さて秋になるとどうなるのやら。紅葉がきれい なんてだけになっては熱帯林や木の問題は蚊やゴキブリの如く(?) 夏の風物誌とになってしまうのか、いやそれではいかん。 私達のフツウの生活の中でいつでも木の問題をかんがえられるようないつもかわらぬ“意識”と“こだわり”が必要だ。 この気持ちもっと松げて行きたいと思うこのごろ。(ち)

